

# 「スチューデント・ライブラリアン(学生司書)」という試み —中大杉並における高大連携の取り組みの一環として—

駒ヶ嶺 泰 暁 (国 語 科)

## 1. はじめに：中大杉並の高大連携の取り組みの概要

2016年8月に文部科学省より出された高大接続システム改革会議「最終報告」※1は、高大接続の要諦を「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の二本立てとし、特に前者については多くの字数を割いて、その内容を以下のように説いています。

…問題の作成に当たっては、実社会の様々な事物や事象に結び付けた問題や、単に条件を当てはめるだけでなく、条件を導き出す力を問う問題、単に解答を求めるだけでなく、解答を導く過程を重視する問題、解答を導く過程の不適当な点を指摘修正させるなど、さまざまな形態の問題を導入する。

(中略)

なお、「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度」など、筆記試験や技能試験によって評価しにくい資質・能力については、特に日々の高等学校学習活動等を通じて多面的な評価を行う。(25頁)

この議論の前提となっているのは、従来型の垂直的で単方向的な高校から大学への「高大接続」の見直しの必要です。その上で、唯一の客観的正解を選ぶことを目指すのではなく、広範で多様な社会において説得的な言説を述べることができるようになる学力と、アクティブ・ラーニングを中心とした主体的な学びの実践の必要性が説かれています。

本来、大学と高校とは、高等教育と中等教育という別の役割を担う機関であるので、今回の改革においても、まず両者のインターフェイスである「入試」のあり方に重点が置かれていることが分かります。つまり、「高大接続システム」を巡る議論は、やはり入試制度に焦点化されているという特徴が有りそうです。

とすれば、この「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、高校段階での「学力」試験であっても、やはり「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を指向するものとして位置付けられている、と言えるでしょう。

しかし、中大杉並が標榜する「高大連携」の理念はそのような一般的な高校と大学との関係の見直しとは少し趣を異にしています。

まず、中央大学と中大杉並との高大連携の現在を浚ってみたいと思います。

高大連携について、高校側からのニーズがどの辺りにあるかを端的に言えば、附属のメリットを生かせるようなシームレスな連携の構築、となるはずですが。具体的には、自らの適性を理解した上での、興味関心に基づいた進学先の選択であったり、大学での学びを良く理解した上での学部学科選びであったり、ということになるでしょう。

それが、大学附属であれば一般的な高校よりも様々な形で実現できるはずですが。ここ数年、本校が進めているのは、中央大学に進学した卒業生が現役の中杉生に対し、自らの学生生活について語る機会を増やす、ということです。折につけ様々に機会を設けることによって、高校生のうちから先輩の大学の様子を伺うことができます。これは、附属ならではのメリットであると思われます。

しかし、その附属のメリットは高校生に留まるものではありません。卒業生にとっても後輩に自らの学びやキャンパスライフを語ることは、自己認識を深めることになるはずですが。また大きな意味で学園への帰属意識の涵養にもなると思われます。

さらに、大学と高校が密接な関係を築くことは、附属にとっての教育効果が高まることはもちろんですが、大学にとっても将来的に有為な学生の獲得に繋

がるものと考えています。多様な先輩モデルから自分の大学生活をイメージし、納得の進路選択をして入学してくる附属出身者が増えることは、他の推薦様態や一般的受験を経て来る学生とは違ったメリットがあるはずです。

ですから、中央大学の附属高校は様々な高大連携の工夫をしています。しかもそれらは、必ずしも4校横並びではない、それぞれの実情に応じた連携のあり方の模索に繋がっています。

以下は、2016年度における中大杉並の高大連携の試みになります。

#### ●科目等履修（経商理・半期／通年）

本校は、科目等履修制度を単なる単位先取りとは捉えていません。もちろん、将来的に当該学部学科に進学した場合には、その科目については既に単位が認定されていることになります。しかし、大学の単位が高校のうちに取得できる、というだけのものではなく、大学の学びを高校のうちに体験することで、自らの能力適正を把握し、主体的能動的な進路選択に結び付けることを目的としています。

#### ●卒業生によるキャンパスライフ紹介・進路相談会（5,6月）

9割以上の卒業生が中央大学へ進学する附属校にとって、OBOGは何よりのリソースです。特に近年は、大学へ進学した後の、自らの学びの在り方を現役生へ語ってもらう機会を設けています。それは、高校生への還元であることはもちろんですが、大学生としての自分をみつめ、自己認識を深めてもらうことにも繋がるのではないかと考えています。

#### ●学部選択セミナー

2015年度より経商合同で行われているゼミ体験等の企画。附属出身の先輩の学生生活の様子や、それぞれの学部のゼミの発表を聞く。2016年度は6月に実施しました。全学年対象ですが、夏休み明けに進路志望評の最終提出を控えた3年生向けと位置付けています。

## ●文学部特別公開講座

この講座は本稿で述べるところのスチューデント・ライブラリアンと密接な関係があるので、少し詳しく述べてみます。もともと文学部特別公開講座は、1999年に文学部13専攻の学びを高校生に分かり易く伝えることを目的として始まりました。しかし2007年のはしか流行の折、大学の講義が中止になった際に特別公開講座も実施できないということがあり、1年のブランクがありました。しかし、翌2008年には再び実施しようとの気運が高まって再開し、様々な改良を加えながら現在に至っています。中央大学の文学部は先述の通り13専攻と多岐にわたっており、一概にその特徴を説明することが難しいので、他学部在先駆けて附属や地域の高校にその魅力をアピールすべきとの意向があったように認識しています。

## ●オープン・キャンパス

杉並のブリッジ講義、あるいは附属のステップ講義、というように附属はそれぞれに独自のつながりを各学部の先生方、あるいは学部事務室と持ち、出張講義や説明会の機会を設けてきました。それらが中央大学の標榜する「家族的情味」の実践であり、個別に成果を上げてきたと思われれます。しかし、近年においてはその数が多くなり、大学の先生方・職員の方々はもちろん、高校生にとっても焦点が絞り込みにくくなってきていたように思われれます。

そこで、高大連携の枠組みを見直す連携会議の下に設けられたワーキング・グループにおいて、既存の出張講義・説明会を集約する目的で始まったのが、2014年からの附属向けオープン・キャンパスです。夏期休業中に行われる一般向けのオープン・キャンパスに合わせて附属生独自の説明会や先輩によるガイダンスが行われています。

## ●ゼミ大会見学（経商）

希望者を募り、多摩校舎で秋に行われる経済学部のゼミ大会を見学します。高校生にも関心が持てそうなテーマを扱うゼミの発表を見学し、事後には学部の先生方の解説をお願いしています。大会最後の表彰式も見学し、その盛り上

がる雰囲気を経験します。

#### ●経済学部のゼミによる訪問授業

経済学部のFLP※2 林ゼミの学生が、ゼミ活動を高校生にも分かりやすく紹介し、その一端を経験させてくれるワークショップです。林ゼミは本校のほかにも、附属に限らずいくつかの学校で同様の実践をされているとの由。

#### ●アクセス・プログラム

これは、広義においては「3年3学期問題」※3への取り組みから始まったプログラムです。2学期までで進路の決まった3年3学期、生徒に対してどのような授業・課題を行うかというのは、古くて新しい問題です。本校は、近年はこれに対して中央大学の各学部で行われているゼミの体験（文経商総政）、第二外国語の説明会（経商）、法学入門講座、法職講座、などを行っています。

#### ●ライティング・ラボ

中央大学のライティング・ラボから大学院生のチューターを派遣していただき、3年生の卒業論文に指導（セッション）をお願いしています。2016年度で4年目となります。（※これについては別稿を用意する予定。）

#### ●スチューデント・ライブラリアン

本稿の主内容ですので、次節以降で詳述します。

このように、中大杉並の高大連携は、入学試験という高大のインターフェイスの接合だけにとどまらない、インタラクティブなあり方を指向しています。やがて中央大学に進学する附属生の進学指導が中心になっているのはもちろんですが、それを取りまく卒業生、大学生、そして高大の教職員レベルでの連携につながるような、あらたな形が模索されているのだと思われます。

## 2. スチューデント・ライブラリアン（以下SL）の発端

文学部特別公開講座においては、当日の講義概要が事前に生徒に配布されます。13専攻が1日5コマで授業を展開するので、生徒はすべてを聴講すること

はできません。講義概要を見て、自分がどの専攻の講義を聴講するかを選ぶこととなります。※4

講義概要には、13専攻毎の先生方からの講義についての説明やメッセージに加えて、推奨本や参考文献が紹介されています。予め知識を得たい者、受講後さらに学びたい者は、それを読めば良いようになっています。この推奨本の紹介は、2014年度から始まりました。

さらに、特別公開講座の終了した後、紹介本を先生方から御提供いただき、一括して高等学校に寄贈願えるようになったものが、「リエゾン文庫」の始まりです。リエゾンとは仏語で繋ぎとか接続という意味です。まさしく附属高校と文学部とを繋ごうという意志を託された文庫と受けとめています。

「リエゾン文庫」は現在では中大横浜にも寄贈されており、開始から4年目を迎えて徐々に広がりを見せ始めています。それと同時にいくつかの課題も出てきました。

まず、毎年40冊ぐらいつつ増え続ける文庫をどう管理していくか。先生方の執筆された専門の研究書から高校生向きの新書に至るまで、難易度には相当の幅があります。それらをどう分類整理配架していくか。また、何よりも専門書も多く含まれるリエゾン文庫を高校生にどう普及させることが可能か。

もちろんこれらは高校の図書室の課題な訳ですが、よりよい方向性を見出し、いくためには大学との連携を図るべきではないでしょうか。

この点について、当時の学部長補佐で高大連携ご担当であった仏文学専攻の阿部茂樹先生に御相談し、御一考を願いました。ところ、阿部先生から社会情報学専攻で図書館情報学を御担当であった山崎久道先生に御図りいただき、「リエゾン文庫のメンテナンスはたいへん興味深いテーマである、それについては司書課程の学生を充てるべきであろう」というアイデアを頂戴したと伺っております。

そのような経緯でリエゾン文庫のメンテナンスをする大学生を「スチューデント・ライブラリアン」として募集をすることになったのが、2015年の2月頃

でした。

### 3. 当初の懸念

そのような経緯ではじまった「スチューデント・ライブラリアン」構想であったわけですが、やはり当初は「はたして、司書課程の学生は集まるのか?」、それから「高校生は興味を示すか?」などの不安がありました。そこで、「リエゾン文庫の普及」というワン・イシューから、「リエゾン文庫の普及を中心とした新たな学校図書室のあり方の模索」というコンセプトのもとに活動を立ち上げようということになりました。けっして簡単ではないと思われませんが、両者の平行な追求は可能なはずです。

そして、大学生に呼び掛けた結果、初年度は大学生3名、高校生1名の参加があり、活動が立ち上がることになりました。

### 4. 立ち上げ期3年間の活動概要

本章は、2014年度から16年度までの「スチューデント・ライブラリアン活動報告」に掲載された、駒ヶ嶺による活動概要の抜粋・加筆です。改めて読み直すと、3年間の概略が掴めるように思います。この活動報告には各年度の参加学生の報告が掲載されているので、そちらを参照すれば、詳しい活動内容を知ることができます。現在は中央大学文学部のHPより閲覧可能であるので、全体はそちらでお読みいただきたいと思います。※5

#### 2014年度 中大杉並高校にとっての「リエゾン文庫」、および 「スチューデント・ライブラリアン派遣企画」について

2014年9月22日、「大阪の府立高校の図書室は、学校司書はもちろん司書教諭の数も不足しており、その約2割が「開かず」の状態になっている」という内容の報道が出て話題になりました。※6 また、高校生（に限らないと思われませんが）の読書離れは時代の流れであり、図書室運営の困難な状況はいや増す

一方であるように思われます。もちろん本校図書室も大阪ほどではないにしても例外ではなく、状況はさほど違わないと言わざるを得ないと認識しています。

そのような状況下において、2014年度に文学部より中大杉並高校に御寄贈いただいた「リエゾン文庫」（文学部13専攻ごとの高校生への推薦図書）は画期的なものでした。さらに今後継続的にメンテナンスをしていただけるとの由、きつと高大の架け橋になるものと考えています。

今回のスチューデント・ライブラリアン企画派遣（以下SL企画）は、その「リエゾン文庫」のメンテナンスをどのようにするか、というところから出させていただいたアイデアでした。しかし、このSL企画が有している可能性は、その範囲に留まらず、大変大きなものであるように思っています。

それは、

①高校生にとって、同世代の大学生が図書室の運営に価値を見出し、実際それに携わっている姿に触れられる意味は、大変大きい。また、高校図書室の現場を知る、という意味において大学生への寄与も大きいはずである。

②①が実現できるのは、附属ならではのメリットである。高大の双方に教育効果が見込めるとすれば、一つの新しい形になると思われる。

③意識の高い大学生と高校生と一緒に図書室のあり方を考える、ということになれば、例えば「発信の場としての図書室」のような新たな可能性に結びつく。

と思えるからです。

本年度の活動は、10月・11月に3回、土曜午後の数時間という限られたものでしたが、上記のような可能性を感じさせてくれるのに十分な大変充実したものでした。3名の大学生はそれぞれ忙しい中、本当によく頑張ってくれたと思います。その活動内容の詳細につきましては、それぞれの学生のレポートを御覧いただきたいと思います。

しかし同時に、SL企画を具現化していく中で、ニッチな活動にどの様に実

質を持たせていくかという課題が改めて見えたのも事実です。今回の成果を大切に育てて行かねばと気を引き締めているところです。

(初年度の参加人数は大学生3名、高校生2名)

## 2015年度 スチューデント・ライブラリアン2015

### 前説

今年度のスチューデント・ライブラリアン活動（以下SL）は、5月16日（土）を第1回として、中大杉並高校の文化祭である「緑苑祭」の期間3日間を含み、都合10回（10日間）実施されました。

昨年度のSLは2学期の後半に3回、3名での活動というささやかなものでしたので、一年ですいぶん大きく成長したと言えます。

参加者も司書課程の学生5名と大きく増えました。それだけ、「新しい図書館活動の可能性の模索」というコンセプトに関心のある学生は多い、ということなのだと思います。

また、今年度は高校生にも呼び掛けたところ、早々に6名の参加がありました。今年度のスタート時における最大の課題は高校生を活動に加えることでしたので、これも大きな進展でした。

### 準備段階

今年度のSLの最大のトピックスは、緑苑祭（中大杉並高の文化祭）に参加を決めてから、展示内容の検討を進めた時にありました。大学生が展示発表を今年度の活動の中心とする、と決めた段階から高校生が参加し、今年度のメンバー全員での検討が始まりました。

その詳しい内容は大学生の報告に譲りますが、「読書の愉しさを発信する」ことについて、とても有益な検討が行われたと思います。本を読むことの愉しさについて、大学生・高校生が熱心に語り合う様子を見ることができたというだけで、私たち教員にも収穫があったように思います。「これは良いものが出

来そうだ」という期待が高まりました。

内容の煮詰めができ、担当を振り分けてからは準備は順調に進展したように思います。もちろん担当のそれぞれ毎にいろいろあったはずですが、そこは大学生が上手くリードしてくれたのではないのでしょうか。

夏期休業期間にも活動しましたが、中杉の空調工事の関係で、中央大学の文学部国文学専攻のゼミ室を借りたこともありました。

文化祭期間の9月18、19、20日は3日間連続で活動しましたが、皆よく対応してくれたと思います。

### 「緑苑祭」当日の様子

毎年のことですが、緑苑祭における図書室への見学者は、少ないのが実状です。

それを思えば、SL展示発表の効果はかなりあったと云えるでしょう。今年度、図書室は、SLの展示発表、選択書道の作品発表、海外研修の展示発表、土曜講座の英文多聴多読の展示、の4団体による合同企画となりました。しかし、他団体の発表が例年通りのものであったことを考えれば、来場者の人数は大幅に増えたと思います。統計を取ったわけではないので印象値ですが、毎時間ごとに様子を見に行った際には必ず数組の見学者がいるのを見ることができました。これは今までにはなかったことです。

とりわけ、本校生徒の姿がチラホラとあったのは、大変嬉しいことでした。次の活動につなげていくためには、本稿生徒の関心を掘り起こすことが不可欠です。「スチューデント・ライブラリアン」という言葉はもちろん、その存在感が少しずつ浸透したかなと思いました。

### 課題・展望

かくして、2年目のSLは順調に終わることが出来ました。御指導をいただいた先生方はもちろん、事務の方々にも大変お世話になりました。ありがとうございます

ございました。それから、学生・生徒の健闘に感謝したいと思います。

先般12月11日の報告会の折りに、大学生からも報告がありましたとおり、文化祭への展示発表を成功させることができるころには来たが、イベント参加をするには時期尚早、というのが掛け値なしの実力のはずです。

また、そのような文化祭への参加がこのSLが目指すべき方向なのかについても、検討の余地があるようにも認識しています。文化祭への参加はあって然るべきですが、その力は日常の図書館活動にこそ振り向けられるべき、という考え方もあるでしょう。今後のSL活動の方向性は、初動の2年間の経験を基に、次のステップのあり方を探るところまで来たように思います。

そのために、次年度もますます意欲のある学生・生徒の参加を期待したいところです。

(二年目の参加人数は大学生5名、高校生6名)

## 2016年度 今年度のスチューデント・ライブラリアン活動について 意欲的な活動計画

新年度が始まり、文学部事務室より今期も司書課程の学生3名の応募があったと伺い、スチューデント・ライブラリアン（以下SL）活動も少し定着してきたのかなと少し嬉しく思いました。となると、今度は高校生の動向が気になり出します。

高校生に対する動きは、昨年度と同様に大学生の作成する募集ポスターによる呼び掛けからスタートするつもりでいましたので、5月に行われた第一回の大学生のみの活動の時に「高校生に訴求力のある力作の作成を」とお願いしました。果たしてその出来映えは素晴らしく、高校生の参加希望者もこれまでで最多の8名を数えることになりました。

また、前2期の活動概要を説明する中で、SL活動は今期で第3期を迎え、今後のSL活動の方向性を定める重要なステップとなると思われるので、全力を尽くしてほしい旨も伝えました。

その上で大学生3人が考えてくれた活動計画は、文化祭参加のみならず、11月までのおよそ半期以上の長い期間に及ぶものとなり、1、「図書室のおすすめ本の紹介（含むリエゾン文庫の紹介）」2、「読書会を行いその成果をまとめる」3、「卒業論文のサポート」というおよそ三つの柱が立ちました。そのうち「図書室のおすすめ本の紹介」についてはこれまでも実施された企画であるので、今期のオリジナルである2と3について触れてみたいと思います。

### 卒業論文のサポート

今年度、新規に立ち上がった企画の一つが卒論のサポートです。本校が3年生で卒論を課すようになって10年以上経過しますが、人気のあるテーマには「少子高齢化問題」「子供の貧困」などの家族の問題や、「再生可能エネルギー」「ゴミ処理問題」などの環境問題が上げられます。これらのテーマについて基礎的な文献や研究者の紹介をし、高校生が研究に入りやすくしようというのが本企画の目的でした。

これに加えて、各種のデータベースや学術サイトを横断的に調べることのできる検索エンジンなどをまとめた一覧を作るなどもしました。

これらの成果は、本校作成の『論文ガイド』の来年度版に収録される予定です。まだまだ立ち上がったばかりの小さな企画ですが、次期SLに引き継いでもらい、より良いものに育ててほしいと思っています。

### 読書会を行いその成果をまとめる

この企画は、各自の好きな「恋愛小説」を持ち寄り、内容を紹介し合ったのち、いくつかの観点からディスカッションを行うという形式で始まりました。大学生はワイルドの「サロメ」を持参し、高校生は江國香織を持って来るといった具合で、なかなか話しを合わせるのが難しかったようです。複数の本について横断的に話し合い、成果を上げるのは大変なことです。夏までに読書会の方向性を見出すことは難しかったように思います。しかし、なんとかその成果

をまとめ、文化祭で発表するところまで頑張りました。

文化祭後の10月、11月は、本校生徒が課題図書で読んでいた本をテキストに決めることになりました。10月には吉本ばなの『TUGUMI』を、11月には梨木果歩『西の魔女が死んだ』を読みました。それぞれテーマを絞り、同じテキストについて議論をしながら読んでいくことが出来たと思っています。特に大学生には夏前との違いが意識されたのではないのでしょうか。

次年度へ向けて

昨年もこの活動報告に書かせていただきましたが、これからの図書館のあり方を探るという目的を掲げている以上、日常的な読書に関わる活動をどのように組み込んでいくかが今期の大きな課題でした。

これについては、期間を通して読書会を持つことで、とりあえず端緒に付くことができたのではないかと考えています。

但し、この読書会については課題が多いことも確かです。担当の私や大山教諭※7は文学研究・教科教育については学んできましたが、読書指導、特に読書の愉しみを普及することについては今ひとつ専門が異なっています。ですから、読書会も本を読み込む方向にこそ向かえ、読書を愉しむ雰囲気を作ることとは違ったアプローチをしたように思います。この点については、今後は是非とも大学の司書課程の御指導を仰ぎたいと思った次第です。

また、今の時代にマッチした図書室のあり方の模索という目標についてはまだまだ取り組みが足りないように思っています。これについてはやはりSNS等のネットメディアの活用がまずは念頭に浮かびますが、ほとんど手付かずとなっています。これは、次年度以降の活動の中で考えていきたい課題です。

(三年目の参加人数は大学生3名、高校生8名)

## 5. 本稿のまとめ

既述の通り、本校における高大連携の概念の最大の眼目は、一般的な高大接

続ではあまり注目されない、というよりはおそらく附属校でなければ実現できない、高校と大学とのインタラクティブな繋がりです。高校生を大学に繋いでいただく、あるいは大学学部が優秀な生徒を獲得するための手段としてばかりでなく、大学生ひいては研究者にとっても高校が（さらには中学が）有意義な場になることを目指すべきであろうと思っています。

そうでなければ、大学の負担ばかりが増え、高校はサービスを受ける側として、受け身の姿勢で高大連携に臨んでしまうでしょう。それでは高大接続など長続きはしないと思うのです。

このSLという小さな試みは、図書室の運営や読書指導という、学習や研究の基礎作りに取り組む活動であり、その分一見華やかさはないのかも知れません。しかし、現在のデータベース社会を作り上げたGoogleやAmazonが、図書館情報学に源流があったり、ロングテール・マーケットに着目することで登場してきたことを参照すれば、これから必要となる学力を醸成するためのヒントに満ちた活動であると感じています。つまり、今後大化けする可能性を秘めているように思っています。

来るべきその日のために、少しずつ内容を豊かにしていきたい。そのように思っています。

※1 「高大接続システム改革会議においては、平成26年12月の中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について」、平成27年1月の高大接続改革実行プランに基づき、高大接続改革の実現に向けた具体的方策について検討してまいりました。」  
高大接続システム改革会議 「最終報告」より 2016/03/31

※2 ファカルティリンケージ・プログラム(FLP)とは、各学部設置されている授業科目を有機的にリンクさせ、新たな知的関心の領域に対応する教育の「場」を設定するプログラムとして誕生しました。学生諸君は所属学部に進学しながら、プログラムの履修ができます。  
([http://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/gp/flp/introduction/about\\_flp/](http://www.chuo-u.ac.jp/aboutus/gp/flp/introduction/about_flp/))

※3 「3年3学期問題」とは、大学附属校にとっては常に問題になることである。12月までに進学先の内定する附属生にとって、3学期の授業への動機を維持することはなかなか困難らしい。現在、本校では1月いっぱいまで授業とし、2月以降は「アクセス・プログラム」と銘打って、大学への学びを高大が連携して行っている。

※4 朝の開始1時間目相当時限には、全体ガイダンスが行われる。また、講義要項には「昼どき文学部」や「研究室見学」などの当日行われる他の企画についての詳細も記されており、たいへん充実した内容となっている。

※5 URL:<http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/guide/cooperation/>

※6 「大阪府立高:「開かずの図書館」2割…行革で専任司書廃止」  
毎日新聞 2014.9.22

※7 教務部高大連携担当教諭。2017年度はSL企画をメインで担当

